あさ 12

2019

鳥影の冬木かすめし風の色

山籟に鳥の飛びたつ冬至粥

病窓に鳥群れて翔ぶなづな粥

枯枝に鳥籠吊し爪を剪る

病窓に糧のパン置き小鳥待つ

松の枝雲宮の窓に鳥交る

鳥の糞凍てし佛頭汚しけり

鳥の巣か宿木かゴッホの墓

突と落つ鳥の骸や神無月

絵と俳句・関合正昭

あと

十二月

須賀忠男

つづれさせ

東京　佐藤　喜孝

日の盛脚を垂らして鴉とぶ

木々たちの立居振舞朝寒し

大久保から東中野とつづれさせ

大空にぶら下がり飛ぶ枯かまきり

晩秋の雨丁寧に降りて去る

東京　森　なほ子

象牙色

天高し銀杏大樹に小さき葉
高きより秋の東京象牙色
池袋西武屋上秋の雲
爽やかや昼の麦酒の白き泡
睡蓮のまだ咲いてゐる秋の水

東京　赤座　典子

秋澄めり

ひともとに濃きと淡きと秋桜
秩父の山くっきり浮かび柿日和
秋澄めり赤城山麓ジオラマに
道の駅秋果のどれも輝きて
柔き風に頬をさしだす芒原

埼玉　秋川　泉

虎徹

朝寒や隣の空地猫のゆく
病む猫の背中をさすり秋の夜
大台風気休めなれど土嚢積む
病む猫と台風の夜を過ごしけり
台風過病みぬき虎徹旅立ちぬ

埼玉　大日向幸江

鰯雲

台所の窓一面に鰯雲
向日葵のバッチをもらふ敬老日
おむすび六つ作るや雨台風
手の平で鳴く松虫に息をかけ
水没の車を照らす十三夜

東京　七郎衛門吉保

カナダクルーズ

カナダ沖野分の来たり浪の船
ケベックにフランスの風蕎麦の花
セントローレンス遡行する船黄葉道
メープル街道日本名付けし黄葉好き
野分去りのたりのたりの大西洋

東京　篠田　純子

行合の雲

女子騎馬戦巴御前の末裔のこゑ
暴風雨明け洗い晒しの銀座さやか
披講者へ名乗り大きく生身魂
行合の雲水門を舟とほる
脚立より軽ろき鋸の音秋の園

東京　篠田　大佳

ばんしう

当て布の焼けるにほひや秋日和
秋うらら寝返りを打つホームレス
秋の昼平和の橋が錆びてをり
青年は急ぎ足なり秋日和
まへぶれもなくばんしうがやつてきた

石川　定梶じょう

雁の頃

秋澄めるなみだは拳もて拭へ
犬小屋に敷いて新藁こころ和ぐ
菜虫這ふ全速力でありにけり
わが秋思胡桃に皺のあることも
棚吊ってものが片づく雁の頃

新米

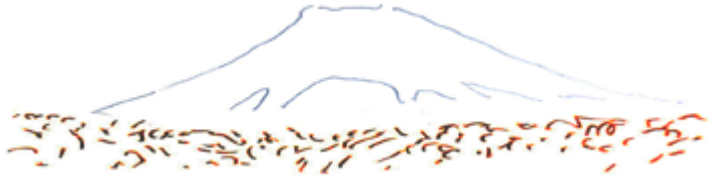
東京　須賀　敏子

秋日和歩荷ゆっくり擦れ違ふ
大颱風ビルのクレーン曲げて去る
秩父路に秋明菊の白群れて
初紅葉令和天皇即位の儀
いもうとの新米届く金曜日

檀の実

東京　田中　藤穂

水澄んでまだ咲いてゐる未草
白萩や夕風のわが机まで
をみなへし盛りと告げてゆきし人
もう要らぬものの多さよ鰯雲
越えてゆく足柄峠まゆみの実



秋思

三重　長崎　桂子

遅れゐてやっと開花や曼珠沙華
秋草に脅ろかさるる刺を持ち
湿度高く意欲失せさう秋思かな
拡大鏡使ふ暮しや長き夜
夫に供ふ秋の好物盛合せ

影の中

佐藤　恭子

名月に手がのびぬくめ酒あふる
秋の日の人影くきと地に置かる
萩の花影のなかまで影のある
秋の草鴉の水平飛行かな
秋の日におぼれ母より老にけり

前月抄

忘れゆくもののひとつに晝の月　佐藤　喜孝

秋暑し早朝夕暮庭仕事　長崎　桂子

秋暑し死後の話に盛り上り　森　なほ子

鶏頭の廃屋を背に整列す　赤座　典子

夕風や紫蘇摘みをれば犬の声　秋川　泉

打ち寄せる波に乗りたり青胡桃　大日向幸江

房州やブルーシートの上の月　七郎衛門吉保

朝露やからり転がる備長炭　篠田　純子

手紙より飛び立つてゆく秋の蝿　篠田　大佳

石だたみ微かに轍良夜かな　定梶じょう

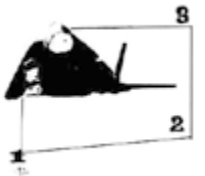
針仕事夜長つくづく嬉しくて　須賀　敏子

螢草吾子に逢ひたき夕なり　田中　藤穂

海月から届く海月の息づかひ　佐藤　恭子

喜孝　抄

佐藤喜孝



長崎　桂子

八千草の乱れ咲き居り小さき花
丈高き草に潜むや秋の蝶
台風過ぎ災禍後浮び来泪し祈

◎「八千草」は広辞苑に「多くの花」とあるが季の言葉ではない。歳時記の取り扱いもまちまちである。角川版大歳時記には無く、講談社版の大歳時記には秋草の項に、秋の草・千草・色草と共にある。その秋の草が咲き乱れてゐる、つつましく小さな花を付けて。「小さき花」が辺りの風情をうかがわせて心地よい。

◎秋になっても日差しが暖かいと蝶を見かける。桂子さんは草の中に潜んでゐる蝶を見つけた。「潜むや」のやはそのやうなときの驚き、感動の表現なのである。「潜むる」、と静かに句を収めるのも秋の蝶に相応しいかもしれぬ。

◎誰にも触れぬことの出来ぬ作者の叫びの俳句。颱風襲来の最中は己や身近な人を案ずるが、ひと落ち着きした後に知るニュースでの惨状、もしかしたら体験されたであらう昭和三十四年の伊勢湾台風に思ひを重ねてをられるのかもしれない。

森　なほ子

鯖雲の腹の辺りに月上る
猫若し野分の揺らす紐にじゃれ
キャンパスに弾ける笑ひ秋高し

◎巻積雲を魚に見立て、鰯雲・鯖雲あるいは鱗雲などと、秋空に広がる美事な雲の模様を親しみを込めて魚や羊に見立てる。この見立てに乗っかりなほ子さんは〝腹の辺りに月上る〟と見立て面白く作られた。この句からさういふ機知のおもしろさは伝はるが、美しい景だなと思へないのが不満。

◎紐は何所に下がってゐるのだらう。家の中と思ひたいのだが〝野分の揺らす〟とあるので戸外だらう。この辺りすっきりしない。しかし〝猫若し〟は野分の最中に紐にたはむれる猫の様子を捉へてゐる。「野分来る紐にじゃれつく猫若し」では。

◎言葉が俳句といふ鋳型の中にすぽっと這入って身動き出来ない気がする。

赤座　典子

洋上の日刊紙で知る秋出水
ゆったりと傾ぐ海原鰯雲
グラッパとジャズを愉しむ夜長の灯

◎船旅をしてゐる船上で新聞が読める。その新聞も出航前に積み込んだ新聞ではない。よく知らぬが電波を介して新聞が毎日発行されるのだらう。その紙上で日本での洪水の惨事を知る。被災地の人々への思ひ。日本から遠く離れた海上でけふの新聞が読めるといふこと。などいろいろなところへ思ひの行く作者である。

◎〝ゆったりと傾ぐ〟に惹かれた。大型船でなければ味はふことの出来ぬこと。この夏、七千トンの船で北海道へ渡ったが、ゆっくり傾ぐ感じはしなかった。凪だったからかも知れない。いや船の大きさだけでの〝ゆったり〟ではない。旅の開放感も手伝ってゐることだらう。海原と共に鰯雲もゆったりと傾いてゆく。

◎「グラッパ」、早速辞書のご厄介。世間知らずといふのだらう。「イタリア産のブランデーの一種。」別の辞書では「ワインの絞りかすで造った蒸留酒。」〝愉しむ〟は少し直截で、句に趣を欠いたか。

秋川　泉

空馬の走り切りたる秋の空
用済みのかかしと遊ぶ子がふたり
月光のプリズムになる杉木立

◎空馬は騎手を振り落として完走した競走馬。さぞかし馬は軽やかに走れたことか。観衆もレースの結果はともかく、笑ってゐたかも知れない。秋空の下、ぎすぎす仕勝ちな競馬場もひととき和んだかも。

◎仲良しのふたり、ほかに遊ぶ子がゐないのかも知れないが。収穫も終りお役御免になった案山子とどんな風に遊んでゐたのかな。用済みと云はれた案山子もまだご用があってうれしさう。

◎月光が木漏れ日のやうに杉木立を抜けて差し込んでくる。太陽光はプリズムで分光すると虹色に分かれるが月の光は……。それにしても杉木立を抜け、散乱してくる月の光。魅力的な光景に出逢ひしっかりと表現された。今月の三句とも情に溺れぬしっかりとした表現である。

大日向幸江

山彦に踊らされてる茸狩
温め酒に病何処かに消えてゆき
彩りの可愛いカボチャはろーうぃん

◎仕事ではなく行楽としての茸狩か。山彦がこっちに茸があるぞとかいふ声に踊らされてゐるといふのであらうか。このぐらいにしか茸狩に不案内なわたしには思ひが至らなかった。

◎百薬の長は心の病に効能がある。〝温め酒に〟は「温め酒に」の〝に〟は省かう。。

◎〝はろーうぃん〟の元は英語でハロウィン、あるいはハロウィーンとカタカナで書くやうだ。平仮名表記は気になる。ハロウインはわたしには縁がないが、孫娘は毎年仮装を楽しんでゐる。先日もいろいろなかたちのカボチャを見る機会があった。あのカボチャは祭りの後食べるのだらうか。

七郎衛門吉保

蟷螂と目を合せ聴くコンチェルト
隠れ蓑秋の湿りに顔を見せ
看護士の声大となる敬老日

◎「蟷螂は馬車に逃げられし馭者のさま」といふ中村草田男の愉快な俳句がある。この句は草田男句のやうに直喩ではないのだが、馭者よりもモーニングを着て指揮棒を振り上げた蟷螂は指揮者に相応しい。たまたま窓の外に蟷螂がゐたのであらふか。「合せ」と「聴く」の間で切って読んだが読み手の勝手読みで無理がある。素直に読めば蟷螂も聴いてゐる様子。またコンチェルトよりシンフォニーの方が指揮者が目立つ、などと面白く読ませいただいた。

◎この頃見かけぬと案じて（?）ゐた蟇が庭に出てきた。秋の長雨を喜んでゐるのだらう。素直な表現で作者の蟇を気遣ふ心根がやさしい。「秋湿り」を「秋の湿り」と使ふのに少し抵抗がある。秋湿り・秋潤きなどはそのまま使ふのに越したことはない。

◎「敬老日」とあるので看護士が大声を出してゐるのは老人に対してだらう。特に敬老日に大声を出すのは何故なのか、今ひとつ分からなかった。それにしても人間は環境に順応しやすいものだ。「看護士」も使はれ始めた時は抵抗があったが、今かうして読んでゐてもなんの障りもなくなってゐるわたしがゐる。

篠田　純子

草の花心経唱へつつ歩く
回転扉首尾良く抜けり秋高し
中学生に貰ふキャンディー秋闌る

◎今月は般若経が二度出てきた。わたしの母は晩年ある宗教に入信してゐた。で、耳にタコが出来るほどきいてゐたが何経だったのだらう。一心に諳んじてゐた経を誦してゐたのを思ひをだした。作者は般若経を諳んじてゐるらしい。この句、経を唱えながら道を歩く姿をなぜかこのもしく思った。「草の花」がさうさせるのかも知れぬ。「草の花」で滋味ある句にしてゐる。

◎回転扉も人間が押して出入りするものと、扉自体が常時回転してゐるものがあるの。先日この自動回転扉に入り、出る機会があった。子供のころ遊んだ大縄跳びと同じ緊張感があった。この扉に入り回転速度に合せ歩を進め外に抜け出た時の「秋高し」に同感した。

◎学園祭での場面のやうだ。見知らぬ中学生（知っている子なら中学生とは言はぬ）に飴をもらふ。「秋闌し」が時間設定のみとは思はぬが今ひとつ鑑賞が難しかった。

篠田　大佳

秋の蜂墓場の蜜を盗みけり
ビリの子の伏して手を振る徒競走
秋夕焼 Siri はやさしくきいてくる

◎「墓場」と書かれるとをどろをどろしいが、子供のころのわたしの遊び場でもあった。夏は特に蝉を含めた虫採りによく侵入した。勿論墓守に見つかると走って逃げなければならない。この句、人と虫の世界を重ねて詠んでゐる。俳人は各自の文体を持ってゐるもの。特長のあるほど面白い。

◎徒競走で転んでしまったのだらう。転んだままで手を振ってゐるといふ。いつもビリの子はレースの数ほどゐるのだが、本当のビリはさうはゐない。伏したままこの子は手を振ってゐる。なぜなのだらう。

◎SNS といふのをすこし前からよく耳にする。分からなくともそのままにして不都合はなかった。最近こういふことらしいなとおぼろげに理解しはじめてゐる。「インスタ映え」とか新語は引きも切らず出現する。この句の Siri は初めて耳にした。鑑賞するために理解しやうと辞書を開いたが期待通り無駄だった。iPhone に搭載されてゐる音声アシスタント機能といふものらしい。わたしは Android なので知らなくて当たり前と。図々しくしてゐる。機械が作る会話に癒される時代になりつつある、あるいはもうなってゐるかも。ウオークマンを立って、瞑目し、聴いてゐる猿の CM が浮かんできた。

定梶じょう

摩訶般若波羅蜜月の大いさは
軒に干す入念の色唐辛子
天の川犬猫も夢みるといふ

◎宗教にも疎いので摩訶般若波羅蜜を辞書で。「偉大な智慧、優れた叡智」と。この句月の大きさではなく「大いさ」。書くと大差ないが耳で聞くと大違ひである。この一語で摩訶般若波羅蜜としっくり合体した一句になった。

◎唐辛子の赤の極みともいへる色彩を「入念の色」と。唐辛子の深い赤に納得の入念。しかしこの入念はむずかしい。難しいといふのは価値判断のこと。私の好きな表現だが、危険な匂ひを覚えたので。わたしの問題。

◎むかし山路を下ってゐるとき道を横切るカモシカに出会った。人の気配を感じたのだろう。向うも立ち止まってふっとこちらを見、おもむろに山中へ消えて行った。その晩私の夢を見るのかなあと想ったが数日後「かもしか寝ぬ晝見しわれをおもはずに」といふ句ができた。この句、天の川につられシャガールの絵を思ひ浮かべた。

須賀　敏子

真っ直ぐの木道行けば草紅葉
秋晴やクライミングの細き綱
大小の団栗落ちて朝かな

◎行けば、すればのばは理屈ぽくて嫌はれるが、この句の行けばは、山旅の解放感に溢れてゐる。尾瀬ヶ原を思ひだした。真っ直ぐも爽快感を倍増してゐる。大きな景色に小さき季語は素晴らしい心配り。

◎体験したことのない、テレビで見るだけの者には綱の細さもさりながら、岩に打ち込んだハーケンが抜けるのではとハラハラ、モゾモゾする。今もカラビナが壊れた刑事ものを見たところ。綱は少し違和感あり。ザイルで収めたいところ。

◎どんぐりは幾種類かの木の実の総称。この句、夜の内に数多の団栗が落ちた。常の夜とは違ふ風の強い日であったことを窺はせた。

田中　藤穂

小鳥来る洪水の報拡大す
夕刊の入りし音す油点草
秋雨や小売店みな消えし町

◎颱風がもたらした洪水は今年も目に余る被害を残した。次々テレビ画面に考へられない光景が映し出される。その颱風も去りお天道様が顔を出し一安心。庭には無事に渡ってきた小鳥が。平和な風景にと思ったが、その後も新たに堤防が決壊した悲惨な町の風景が陸続と映し出される。

◎自慢にはならぬが新聞を取らなくなって久しい。作者は夕刊の来るのをいまかいまかと待ち構へ

てゐたのだろう。油点草の側を通って夕刊を取りに行く。入りしは「いりし」、「はいりし」と二様に読める。はいるは這い入る の転化とも。またしは「三笠の山に出でし月かも」といふやうに過去にあったことに使う。「夕刊の入りたる音油点草」

◎本当にさうだなとむかしを知る者は思ふ。わたしのぐるりを見てもこの句の通りだ。市場に最後まで肉屋さんががんばった。年寄夫婦でやってゐた八百屋も、御用聞きに来た酒屋もしかり。先だって坂を下りたところに本当に小さな八百屋を見つけた。無駄話をして帰ることもできる。きちんと日曜祭日は休む普通の八百屋。果物と云へば蜜柑と林檎ぐらい。先日は珍しくバナナが置いてあってびっくりした。

中川句寿夫さんをしのんで　五

酒提げて来て屋根替を手伝へり

ぜんざいも出て分校の雪下し

楢炭の俵の蓋は楢の枝

一竿に満たず大根干してあり

色足袋や生涯妻のここのもん

秋日傘傾げて魚籠を覗かるる

着膨れて拈華微笑といふ言葉

ついてゆく破目となりたる泥鰌鍋

炬燵より出てゐる足を踏まれけり

手術せずにすみたる冬の帽子かな

良い方が「あを」のお仲間に入ってくださったと喜んでおりましたのに、急の御他界本当に残念でございます。全句に滲む能登輪島の郷土色とても味わい深いものです。随分昔になりますが主人と金沢から能登半島を一周した事があります。旅館を朝出て輪島に着いたとき朝市はもう片付けているところでした。狼煙岬や時国家、日本海を眼前にした鄙びた旅館も忘れられません。句寿夫様お元気なうちに一度お目にかかりたかったと残念です

田中藤穂　抄

鼻

恋猫の鼻先なでて指よごす　竹内　弘子
箸がささるまで鼻唄の蕪蒸　佐藤　恭子
子猫抱く質屋の主人鼻眼鏡　篠田　純子
犬の鼻くろく湿れる夏来る　竹内　弘子
草の露鼻濡れてゐる繋ぎ牛　栢森　定男
穀象や鼻つ柱を折ってみるか　佐藤　恭子
銀杏に鼻を押さえて撤退す　篠田　大佳
靴磨く鼻はピノキオ冬の駅　篠田　純子
剥落の鼻に秋日の掠りたる　佐藤　恭子
青葡萄うごきてやまぬ兎の鼻　佐藤　恭子
外つ國の一歩は汗の鼻さきだて　佐藤　喜孝
目は圓く鼻は三角チューリップ　赤座　典子
踊子の傾げる鼻緒小刻みに　鎌倉喜久恵
石蕗黄なり海はあをなり岬鼻　竹内　弘子
なかんづく穀象の鼻うすぐらき　早崎　泰江
のびきつて鼻くすぐれる猫じやらし　田中　藤穂
鼻先を貘の通りし夏野かな　篠田　純子
木の葉髪ホフマン鼻の夫である　長崎　桂子
青い味鼻にぬけたり市の葱　赤座　典子
掛雛や鼻緒すげゐる半跏趺坐　早崎　泰江
鼻先に不意をつきしは春の蝿　篠田　純子
鹿の鼻ぬれにぞぬれし初紅葉　田中　藤穂
鼻固くして大寒の墓地歩く　定梶じょう
鼻赤き山師に枯葉しげく降る　篠田　純子
ひめつばき戦火で目鼻溶けし像　定梶じょう
春宵のクレオパトラの鼻のこと　長崎　桂子
焦げ果てし原爆の日や眼に鼻に　早崎　泰江
鼻に巻く草青々と冬の象　竹内　弘子
冬木の芽キリンの鼻のこそばゆき　佐藤　喜孝
てのひらで目から鼻撫づ冬の暮　篠田　純子
草笛や鼻にはなぢの綿を詰め　芝　尚子
子の低き鼻までとどくシャボン玉　佐藤　恭子
深酒や猫の尻尾が鼻先に　定梶じょう
春の月鼻づら白く馬睡る　竹内　弘子
柴犬の鼻の濡れいろ二月尽　佐藤　恭子
木枯にむかふ鼻筋とほらぬ子　竹内　弘子
山椒魚醜の目鼻のありどころ　竹内　弘子
鼻風邪が治らぬといふ子の電話　長崎　桂子
秋の風鼻を擽る魚焼く香　竹内　弘子
目も鼻もかくれむばかり田水張る　大日向幸江
手の甲で鼻水を拭くパンダ前　竹内　弘子
風化地蔵吹雪のあとの目鼻かな　佐藤　喜孝
息白し犬と猫鼻つき合うて　定梶じょう
鼻を撲つ老杉の香や冴返る　竹内　恭子
隠岐牛の鼻ひえびえと金環食　竹内　弘子

鼻長きバスに酔ひしも青田道　森　なほ子
葱坊主鼻たれ小僧消えし村　森　なほ子
実の楔植目鼻画けば卒寿かな　中川句寿夫
風邪引きか鼻水啜る齢かな　黒澤　佳子
涅槃図や嘆きの象は鼻を上げ　秋川　泉
梅筵とり込み目鼻たそがるる　定梶じょう
今年米手にし鼻よす目きききかな　七郎衛門吉保
餃子練る鼻にツーンと咳き込みぬ　黒澤　佳子
花生け
床の間に玻璃の花生け夏隣　赤座　典子

花色

ブルームーンてふ淡き花色秋薔薇　早崎　泰江
菊人形地味な脇役花色で　大日向幸江

花売

北尾根に雪残りをり花売女　田中　藤穂

花形

かけっこはあの子花形青蜜柑　斉藤　裕子

花柄

花柄と縞柄並べ冬衣　秋川　泉

花子

小鳥来る太郎花子に糸電話　芝　尚子
高齢後期象の花子の春惜む　堀内　一郎
子守唄いつも揺れゐる象花子　佐藤　喜孝
チューリップ象の花子に歯のひとつ　篠田　純子
憲法の日象の花子はうしろむき　佐藤　喜孝
花子は象千の言葉で雪に立つ　佐藤　恭子
初夏や井の頭の友花子さん　田中　藤穂
物故者に象の花子も年暮るる

話

鷺替の話におよぶ春炬燵　後藤　志づ
水盤の石とあれこれ話し込む　赤座　典子
老恩師話題おもしろ夏料理　田中　藤穂
藤袴の名を問ひ話ほぐれゆく　芝　尚子
ながが話して怠けをり師走人　堀内　一郎
先いきの暗き話や柚の風呂　渡邉　友七
笹鳴に話の接ぎ穂遮ぎられ　栢森　定男
家売つて食ひ継ぐ話春の雨　篠田　純子
草螢芭蕉隠密てふ話　田中　藤穂
聞き役に回り夜長の話の座　栢森　定男
熱燗に話がはづむ蹴飛屋　関口　ゆき
此処だけの話とはしやぐ螢烏賊　赤座　典子
遠くない話で墓を洗ひをり　堀内　一郎
朝寒し影絵のごとき少女の指話　渡辺　友七
冬ぬくししばらく続く立話　赤座　典子
子の話しつつ夫婦の胼ぐすり　篠田　純子
ここでなら通じる話竈猫　赤座　典子

山荘慶子様が十二月十日お亡くなりになられました。生前のご厚誼本当にありがとうございました。

佐藤喜孝

12月はこの17日に吟行に連れて行っていただいた折の写真。カメラは重たいのでもってゆかなかった。スマホでもといたずらに撮った。後日スマホが勝手に二枚の写真を合成しましたよと云ってきた。私が合成するより違和感なく繋げてあった。siri の話しではないが不思議な世の中だと改めて実感した。隅田川・築地川・浜離宮・築地市場跡と写ってゐる。壁紙にして疲れると眺めてゐる。（喜孝）

あとがき

今月号

今月号は遅刊の極み。いつもの欄をいくつか来月の回しました。ご了承下さい。

表紙

11月号の表紙は五六十年前の奥多摩での景。どこかははっきりしない。後ろにさがれず橋も撮りたかったので変な形になってしまった。今まで炭焼き小屋かと思ってゐたがよく見ると煙突がない。何ナノだらう。

二〇一九年十二月号
発行日　十二月二十四日
発行所　東京都中野区中央2-50-3
電　話　090　9828　4244
ファックス　03　3371　4623
印刷・製本・レイアウト　竹僊房
カット／須賀忠男・福井美佐子・ティリ　エイマ
表紙・佐藤喜孝
会費　一〇〇〇〇円（送料共）／一年
ゆうちょ銀行（普）（店番018）4586402
佐藤　喜孝（サトウ　ヨシタカ）